

# ロハス・メディカル

Lohas Medical

vol.145 冬号  
2017年

患者と医療従事者の  
自律をサポートする  
月刊院内情報誌

特集  
連載

口から人生を豊かに

寿命が縮むかも  
歯周病を防ごう

新連載

豊饒な生活支援  
銀木犀・下河原忠道の軌跡

特別  
記事

がん医療の常識  
ここまで進んだ

それって  
本当？

坂の多いまち  
健康にプラス

集中  
連載

梅村聡のあの人に会いたい  
— 山本佳奈

好評  
連載中

- 睡眠のリテラシー
- ハート・リング通信
- あなたの悩みにお答えします
- 寝たきりバイバイ  
体幹トレーニング
- 今どきの保健理科



# 豊饒な生活支援 銀木犀・下河原忠道の軌跡 美しいものに導かれて

下河原忠道

株式会社シルバークウッド代表取締役

新連載

躯体売りから  
高齢者住宅への必然的転換

**日**に当たると、青空に白い光を放ち燦然と輝いている。月明りでは、影と共に透き通った空間を見事に生み出している真っ直ぐな躯体。それがいくつも重なり合って出来る四角形と三角形の織りなす銀色の構造体は、息を呑むほどに美しい。これがシルバークウッド。この景色を知ってしまったら、心を奪われてしまうのも分かってもらえるだろう。

この美しい躯体をもって自

分たちで創り上げる住宅に思い入れのないはずがない。私たちが施工・運営している高齢者住宅「銀木犀」は、株式会社シルバークウッドの中核を成すものだ。

これまで様々なインタビューや質問を受けた。躯体屋さんがなぜ高齢者住宅の運営をするのですか？ その度にそれは必然的なものだと思ってきましたが、その時に何を感じていたか、自分がどんな選択をいかにしてきたのかを、当時

を振り返りながら辿ってみた。おそらくこの作業は、これから自分が進む道にも通じるものだと信じている。

## 骨組みから細部へ

私は建築の力を強く信じている。現場の職人を3年半やってきた。骨組みシステムの開発には7年間かかった。

最初は、骨組みのことに興味があつて、建築自体には興味がなかった。骨組みの仕上げりへのこだわりは、ディテールの丁寧な仕事に反映されていった。ビス一本の頭の出っ張りをどうしたらなくせるか、いかにしたら現場で素早く美しいものが建てられるか、出来上がったときの構造の美



しもがわら・ただみち●1971年生まれ。サービス付き高齢者向け住宅「銀木犀」を運営。財団法人サービス付き高齢者向け住宅協会理事。2015年、アジア太平洋高齢者ケア・イノベーション・アワードでアジア最優秀賞受賞。16年より「VR認知症プロジェクト」開始。

しさを追究することによって、骨組みだけでなく、他の所にもこだわりの持つようになった。

例えば、骨組みの土台となる基礎工事だ。基礎工事がうまくいかなかったら、構造も美しくいかなかった。基礎工事のアンカーボルトに数センチのズレが生じると、構造躯体そのものに歪みが生じてしまう。美しい骨組みのための美しい基礎を造ってもらうために、基礎工事をする人にあるこれと提言してきた。高い精度で造られる基礎と数ミリ単位で計算され組み立てられる構造パネルの整合性は、その美しさを正直に表した。そのような精度の高い工事現場



シルバーウッドの一例。スチールパネル工法で作り上げる構造躯体（建物の骨組み）をこう呼ぶ。

は、空間の空気が違うことを感じたものだ。私たちが開発した骨組みのシステムは完成度を高め続けていった。

### 普遍的な美を求め

この美しさの追究は、ある意味で自分にしか分からないと思われがちであるが、もちろん主観的なものに終わらせるつもりはなかった。誰もが美しいと思うもの、つまり普遍性を追い求めてきた。

この構造躯体に込めた理念は、高齢者住宅を運営する現在の軸にも通じている。「銀木犀」も色々な人が集う場所なので、建築として美しいかどうかというのを証明するのに、非常に重要な場所と言える。普遍的に美しいものは私の主観を超えるものであるはずだ。骨組みの話に戻ろう。



サービス付き高齢者向け住宅・銀木犀鎌ヶ谷の外観(上)  
同鎌ヶ谷富岡の外観(下)

この美しい躯体を我々は「スチールパネル工法」と呼んでいる。アメリカで現場の職人に混じって必死に獲得したこの技術を、日本に持ち帰り、構造実験や耐火実験を繰り返して、国土交通省の鉄骨構造技術基準で全く新しい薄板軽量形鋼造として大臣認定を得た。特許も取得した。

### 漠然と高齢者住宅

骨組みで儲ける仕組みを作るには、「でかい建物」を建てないといけなかった。色々

やったものうまくいかず、鉄屋だった親父から「そんなものは売れない」と言われたこともあった。親父の会社に戻ってくれば良いという親心だったと思うが、性格としても諦めるなんてできなかった。開発費は3億円もかかってしまった。従業員3人からの出発は、全く順風満帆でなかった。

色々やったことの一つが、『日経メディカル』誌での広告だった。恐らく後にも先にも、『日経メディカル』に構

造躯体の広告を出したのは自分だけだと思う。

とにかく大きな建物を建てないと売り上げも利益率も上がらないことは分かっていたが、前例実績のない建築工法が大型建築に採用されるはずもなかった。だから建てさせてもらえる建物は何でも建てた。最初はコンビニやファミレスなどをたくさん造った。

そして、もつと大きくなってからの時代にどんどん建てられるものとして、漠然と高齢者住宅がいいだろう、介護とか医療とかの建物を建てるには、メディカルだろうから、日経メディカルに広告を出そうという、非常に安易な考えだった。

その頃、滋賀県の琵琶湖のほとりに建てるという高齢者向け賃貸住宅（後の高齢者専用賃貸住宅）の依頼が、予期せずには舞い込んできた。残念ながら日経メディカルの広告のお蔭ではなかったが、それまでの実績の中で一番大きな

建物だった。話が来た時には足元を見られかなり値引きさせられたので、これでは儲からないと思っただけで、なぜだかこの仕事を取らなくてはと焦りにも祈りにも似た気持ちだった。この受注が取れるかどうかで人生が決まると。無事に受注し、構造躯体が建てられた建築現場で将来の夢を仲間と語り合ったことを覚えていた。これからはこの分野に強い躯体屋になろうと誓い、あらゆる高齢者施設の現場を見に行くことにした。

### 美しくなかった

最初に視察した所が療養病床だった。胃瘻、身体拘束、患者のうめき声、ある患者に腕を掴まれ助けると言われた経験は、後の高齢者住宅運営に大きく影響している。

デイサービスに行った。幼稚園児のようなお遊戯、お手製のボウリング、壁に今月のお誕生日として

利用者の顔写真が貼ってある光景に気持ち悪さを感じた。幼稚園のそれと同じなのか。

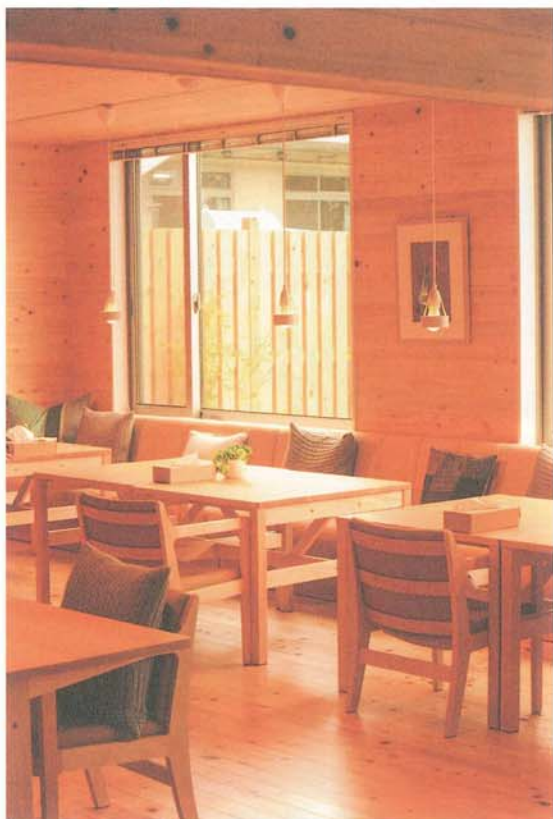
介護甲子園なるものも見た。行った。「私は利用者さんのために」と叫ぶ姿に強い違和感を覚えた。介護される人、する人を区別している個性のないパステルカラーのユニフォームがダサく見えた。何もかも美しくなかった。

語弊があるかもしれないが、人の生活を支える介護というビジネスが、最低限の幸福と

社会的援助を提供する福祉になつてしまったと言える。

これらの視察から得たものは、正直つらいものばかりだった。

あの美しい躯体が織りなす美しい高齢者住宅の中で、つらいものではなく美しい瞬間が繰り返され蓄積されてほしい。しかし、高齢者住宅のあるべき姿を日本では見つけられず、海外にその答えを追い求め、バックパッカーとして旅に出た。



自然光が柔らかく差し込む銀木犀薬台の食堂